農業農村の活性化を学ぶ

上越市農業農村議員連盟（全議員が加盟）では、11月8日と11日、各部会で各地の視察を含む研修を行いました。以下は各部会の報告です。

農村活性化部会

上野議員が所属する「農村活性化部会」は、大潟区にある「あさひ池総合農場」（平沢栄一代表）と「大潟ナショナルカントリー」（竹田香苗代表理事）を訪問し、それぞれの営業展開と後継者育成の取り組みを視察しました。

「大潟ナショナルカントリー」の竹田さんのお話は、「組織体としての経営の方向性」を見事に分かりやすく示すもので、大きな敬服と強烈な印象を受けました。「地域の農業を継続させる基本は人だ。夢だけでは生きられない。どうしたら農業で生きていけるか」、「一人２００万円から２５０万円の所得を得られる農業を目指すこと」「それには安心安全なものを、量を売る、高く売る」「その仕組み作りが大切だ」「農業をやってみようという人はたくさんいる。その受け皿をどう作るかが大事だ」・・・と竹田さんは語ります。

120町歩に及ぶ米作りが主体ですが、大豆やブロッコリー、アスパラ、トマト、枝豆、オータムポエムなどを栽培・販売し、最近ではル・レクチェ（洋梨）の栽培にも取り組み始めました。畑作では１年２作で米よりも大きな収益を上げています。

「あさひ池総合農場」では後継者づくりに力を入れ、若い人の参入など、徐々に成果も出てきています。

農産物生産部会

橋爪議員の所属する「農産物生産部会」では、パプリカの大規模栽培を行っている農事組合法人と学校給食用の野菜を栽培している農家の話を聞きました。上越農業の多面的な発展を考えたときに、たいへん参考になりました。

高田ワールドスーパーライスで、パプリカ生産を視察

上越市で園芸を盛んにしていく上で雪対策などへの支援強化が必要なこともわかりました。

食料流通安全部会

樋口・平良木両議員が所属する「食料安全流通部会」は、柿崎小学校を訪れ、給食での地産地消の取り組み状況について視察しました。

柿崎区は５つの小中学校の給食を二つの給食センターで調理しているため、遠方の学校に温かい食事を届けることがかなりたいへんで、特に冬場は苦労しているとのこと。自校給食が求められます。

こうした弱点がある一方で、地産地消の点ではいろいろな工夫をして推進しています。全市の統一献立を基本とする中でも、提供日を柔軟にずらしたり、区独自のオリジナルメニューを入れたりする取り組みや、地元産品の収穫時期を把握して巧みに生かす取り組みなどを行っています。この結果、地元産の食材の使用率は10.6％と、全市平均の4％を大きく上回っています。このほか、野菜は区内の生産農家を紹介しながら提供する、地元の伝統料理や丈夫な歯を育てる料理をとりいれるなどの工夫をしています。

給食を熱く語る滝沢栄養教諭

日本共産党上越市議員団ニュース

No.２５８　２０１０年１１月２１日

連絡先　橋爪　法一　５４８−３６２８（吉川区代石）
樋口　良子　５４４−６８０２（中門前３）
上野　公悦　５３０−２２０３（頸城区中柳町）
平良木哲也　５２５−９０９６（上中田）

バリアフリーの先進地 飛騨・高山市に学ぶ

文教経済常任委員会　上野　公悦

11月９日から10日にかけて行われた文教経済常任委員会の行政視察では、富山市で「就業支援の取り組み」について、岐阜県高山市で「観光と商店街支援、まちなか活性化」について、それぞれ先進事例を学びました。

このうち高山市では、市商工観光部長の小瀬光則氏や商工課主任の川原幸彦氏から、産業振興計画やまちづくりの実際、観光の状況などについて詳しく説明を受けました。

高山街並み保存地域の三町

小瀬部長の話をお聴きし、少しでも住みよいまちにしたいという強い思いが伝わってきました。「視察をされて良かったと思われたことは教えてもらわないで結構。悪いことはどんどん言ってください。私たちはマイナスをゼロに、ゼロをプラスにしていきたいと思っています」との言葉は深く印象に残りました。

合併後、年間４００万人の観光客が訪れるそうです。しかもイベントだのみではなく通年観光です。このうち半分の２００万人が市内で宿泊するというのですから驚きました。

平成８年からは、特に台湾向けに観光誘致を粘り強く行ってきたそうですが、昨年は14万人の外国の人たちが訪れたといいます。

さらに、「街並みも古いものは古いままで大事に後世に残したい」そんな思いから、市民の間で自主的に「まちなみ保存会」ができ、「景観保存条例」が市民活動を後追いする形でできたといいます。市民のおもてなしの心も、観光地高山の大きな財産になっており、市民こぞっての「受け入れ態勢」の学習研修も行われているとのことでした。

高山市はバリアフリーの先進地ともいわれているそうですが、市内を散策してみて本当に感心しました。道路の段差解消だけでなく、行政から補助金もあって商店や施設のバリアフリー化も徹底しています。

まちの案内標識は５カ国語で、しかも古い街にふさわしくしゃれた形で表示されているほか、観光パンフレットは10カ国語、ホームページは実に12カ国語で表わされています。

さらに、障がい者用にはタッチパネルや音声での案内など、本当に誰にも優しいまちづくりになっています。また来たいと思うまちでした。